
死にたがりの声

流郷進一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりの声

【Nコード】

N3280Z

【作者名】

流郷進一

【あらすじ】

色々な人間模様が綴られていく予定です。

死にたがりの声

「氷山筑紫くん、十八歳。学年が上がった時から大学受験のため律儀に勉強に励むも、最後にその言い知れない感情に駆られて自分の人生に疑問を抱き、ドロツプアウトする。現在はそこそこ収入に恵まれた両親の庇護のもとで将来に何の希望も持てず、ただダラダラと寿命を消費する毎日を送っている、と」

女性は片手に持った手帳に目を通しながら、一息にそう言い切ると。

「話を受けた私個人としての総括は大体こんな感じなんだが、聞いてどこか訂正したかった箇所はあるかい？」

手帳から顔を上げ、薄いレンズ越しに覗く涼しげな眼を、真っ直ぐ僕の方へと向けてきた。

彼女の言ったそこそこ裕福な家庭を象徴するかののような広めのリビングの、テーブルを挟んで向かい合う柔らかなソファに座りながらのやり取りだ。

「いや、その通りです。特に無いです」

「そう、良かった。だったらやはり気にしなけばならないのは、言い知れぬ感情、とやらのことだろうね。そこをもう少し掘り下げていこうか」

そう言うと再び手元の手帳に視線を落とし、手先の滑らかな動きで何かを書き記していく。

僕は。

その間、どこか怪訝な表情をしていた、のだと思う。

「ん？」

メモを終えた彼女が少しばかりその眼を丸くして、作り物のような透き通った声で僕に尋ねた。

「ははっ。まあ、訝しむのも無理のないことだと思うよ。ネットの簡易投稿サービスでひたすら壁を殴るような言葉を吐いていたら見

知らぬ人物に突然コンタクトを取られて、悩みがあるなら聞こうじゃないか、ときたもんだからね。警戒するのは当然だ、と言っても

……」

家にかけてからというのは、些か鈍感な反応だと思うけどね、と妙に格式ばった装飾物の整頓された部屋を見渡しながら笑った。

綺麗だが、彫刻のような冷たさのある顔。長く伸ばした艶のある黒髪。とても落ち着いた雰囲気があるけど、年齢はよく分からない。それでも多分、成人はしているのだと思う。

初対面の印象は　その、僕には分不相応の過ぎる容貌にも圧倒されたが、それ以上に、理知的で、どちらかと言えば冷徹な、機械のような人だと思って、少し怖かった。

雪のように白い、体温を感じさせない色の肌と言い、あまりにも人間離れしていたからだ。

しかし蓋を開けてみればそれはどうやら印象に過ぎなかったらしく、その振る舞いは決してふざけているわけではないが、余裕に溢れていて、よく笑顔を見せる。

待ち合わせ場所に　外に出ることを想像しただけで赤面し、鏡の前で服装に四苦八苦する内に発汗してしまうような僕が、とても話しやすいと思える人だった。

それでも。

彼女が述べた通り、その邂逅は余りにも唐突で、言ってしまえば異常なものだ。

思い切って信じたい、胸中を打ち明けたいのにそう出来ない昔から僕の邪魔をしてきたこの臆病な警戒心が、そのような場面において働かないわけがない。

それじゃあもうちょっとだけお話をしようか、と彼女は作り物のような声で、どこか優しさを含ませながら言った。

「キミの疑問が解けるまで、どんな質問でもしていいよ。まあ先に断っておくと、プライベート方面の面白い話は全くないけどね。これといった付き合いのない、仕事場で寂しい一人暮らしさ」

言いながら、自分で笑う。その外見と比べて、笑い声はとて自然なものように、僕には聞こえる。

僕は。

「仕事って、一体どんな……？」
そう訊いた。

「メールでやり取りした時にも伝えたと思うけど、じゃあもう一度言おうか」

愚昧極まりない質問に、これといって嫌がる素振りも見せずに、彼女はソファの上で一度背筋を伸ばした。

「取りあえず掲げている看板には、天宮人生相談所、と外連味に欠ける記号が乗っているよ。実態もまあ、大袈裟なものじゃない。困っている人の所に出向いて、場合に拠ってはご足労頂いて、話を聞いて出来る助言があればする。料金も大した額じゃない。今時なら中学生のお小遣いでも済む程度だ。それで少しでも救われる人がいるなら、と思ってるけど、実際どれだけ貢献できてるかは分からない」

最後の方は苦笑が混じっていた。僕は不必要に慌てて、何も知らないくせにそんなこと無いですよなどと言ってしまう。

でも本当に、彼女が本当に待っていてくれた時、その事実だけで僕は僅かながら助けられた気にもなったのだ。

声もかすれ気味で、フォローにもならない小人の醜態を、それでも彼女は有難うと言葉にして感謝した。

「でも、それはキミの警戒網をほぐしただけの情報にはなり得ないね。嘘を言っているかもしれない。疑いの証拠を提示するのは簡単だが、その逆は往々にして難しい。さて、どうしたものか……」

「いや、もういいですよ」

ん？ と彼女が疑問を如実に浮かべた顔をする。

そして、僕は自分から切り出したくせに赤面した。これ以上の説明はいらないと思ったのは本心だったけど、果たして今のタイミングで、今の言葉選びで正しかったのか、もっと良い伝え方があった

んじゃないか、そうやって過去を何度も反芻して探っていく度に落ち込んでいく。

僕の、いつもの癖だった。

「信用してくれるのかい？」

彼女のフォローは簡潔で、自身にあふれていて、分かり易い。

「ええ、と言うより仮に貴女が碌でもない人物だったとして、もうどうでも良いというか……」

たとえば彼女が巷に無数に溢れている危険で奇怪な集団の勧誘員だったとして。

まともな武器を持つことも出来ず、常にひたすら身を屈めて自衛を図っていたような僕にももう一つの、投げ遣りな諦観を持つ一面があった。

ここで勧誘を断り続けても、家の住所が団体に漏れたりすれば、こんな子供を抱えた憐れな両親にだって必ず迷惑が掛かる。祖父母やその他の血縁者にまで影響が広がるかもしれない。

到底自分一人ではケアし切れない被害が出るかも知れない、けど、それがどうしたと言うのだろうか。

それを防いだからと言って、僕のこれからに何か変化があるのだろうか。

それを防がなかったからと言って、僕に何か不都合があるのだろうか。

生活が不自由になると、どこの誰から恨まれようと、そんなもの。

全部、承知の上じゃないか。

「それは話の運びとしてはとも都合が良いけど、キミの人生にとっては結構な障害になる価値観だね」

雰囲気が一変する。氷のような表情にユーモアを含ませていた口調が、神妙なものになる。

「どうしてそう思うんですか？」

僕は言う。

「だって、そうじゃないですか。誰かに迷惑が掛かるから駄目だとか、一人前の人間としてどうあるべきだとか、それを守らなかつたからってどうなるんですか？ 守つたらどうだっていうんですか？ そんなことに固執する人間に好かれるか、嫌われるかっていうだけの問題でしょう？ 僕はそんな人にどう思われようと、どうでもいいんです。そう考えたら、今まで真面目にやっていたことが全部馬鹿馬鹿しくなつたんです。そう考えたら……」

息が荒れて、顔面が茹蛸みたいに紅潮したみつともない顔で。

「人生自体が意味の無いような、下らないことしか無いようなものに思えて、とても悲しいんです」

言い続けている間、僕はずっと彼女から目を反らしていた。誰かの目を見て話すことなんて出来ない。彼女の瞳は、射竦められそうで、尚更だつた。

本当に、恰好悪いことこの上ない。

でも僕のこの考えは間違つてない。確信がある。

倫理、道徳、常識なんてものは 人間としての尊厳を保つための模範と言うよりも、それを逸脱した者を叩くため、他人を傷付けるという背徳の快感を肯定的に得るための免罪符としての働きしかない。

その統率機能自体のミスには誰も関心がない。仮に気付いても見なかつたことにする、何故なら。

人はそれほど器用ではないし、清潔でもないからだ。

人という存在で居るためには、人は欠陥だらけだ。

下らない。

本当に下らない。

大学に入って、社会人になって、その先に一体何があるというのだろうか？

「人生というものそれ自体に、意味は無いよ」

彼女が最初の時のような口調に戻って言う。

僕は、その言葉の意味を汲み取ることが、直ぐには出来なかつた。

「え……？」

「生きてれば良いことがあるだとか、人生は本来素晴らしいものだとか、そういう戯言はあちこちで囁かれているけどね。そんなものに耳を貸す必要なんて無いのさ。ああいうのは能天気が能気宛に発信する自己満足だからね。人生をただ一つの事象として見た時に、その属性をつけるのは自分しかいないんだよ」

僕は顔を上げる。彼女の顔を見る。

氷のような表情が 春の様に、と言うのは言い過ぎだけど、柔和になつて、どこか自嘲するように笑みを浮かべていた。

「つまり、意味の無いものに自分で意味を『持たせる』のが人生だ。良いものにするのも悪いものにするのも自分次第。だけど、確かにその意味を誰かに強制するような態度は頂けないよね」

さて、と手元の手帳が音を立てて閉じる。

「じっくり探りを入れていこうと思っていたんだけど、殊の外早急に話が進んだね。いや助かるよ。それでは」

彼女の言葉は、声質は冷たいが配慮に満ちていて、話し方がいかにも人間的に語りかけるようで、とても聞き取りやすい。

けれど、その時。

僕は決して逃れない魔力を 彼女の口から紡ぎ出される言葉の羅列に感じていた。

「カウンセリングを、始めようか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3280z/>

死にたがりの声

2011年12月11日11時45分発行